

方言研究の回顧

平山輝男

「方言研究三十年の回顧」を書くようにとの編集主任からのたよりである。この際、二十数年前の私の初期の方言調査と学界の環境とを回想してみよう。

私は明治四十二年に薩南に生まれ、東京の麻布中学に入学するまでそこに育ったので、東京に出てからも郷土が懐かしく、その後の学生生活の休暇にはかならず両親のもとに帰省したが、その道すがら、汽車を途中で降りては諸方言に親しむ機会が多かった。

しかし、大正の末から昭和の初にかけては方言に対してはただ趣味的なもので珍しい俚言や面白い語法を手帖に書き込むていどであったから、科学的研究とはほど遠いものであった。したがってその当時は、国語学や方言研究に一生をかけるようなことは夢想だにしなかったことである。

ある不慮の事情で一生の志望を大転換しなければならなくなった昭和四年の末、麻布中学時代の恩師であり、校長であって中学卒業後も父代りの保証人であった清水由松先生と、その郷土敦賀での後輩だった橋本進吉先生のおことばで、人生第二の改新目標を国語学専攻に決めた。この頃、最も心をひかれたのは、国語音

韻史の研究で、特に雑誌『帝國文学』以来の橋本進吉先生の「上代特殊仮名遣の研究」に関する業績には心をうばわれた。

その後、金田一京助先生と折口信夫先生のおすすめで、未熟ではあったが、「上代特殊音韻の研究」という学部国文学科の卒業論文を作り、続いて「日本南方音韻の研究」という方言音を主な資料とした研究科（現在の大学院に当たる）の修士論文を書いた。つまり私の研究興味は「国語史と方言」という問題にあった。

これよりさき、これらの論文作製に必要な方言資料採集の昭和五年～七年の頃、教えられるところの多かった論著は、東条操先生の『大日本方言地図、国語の方言区画』（昭和二年、育英書院）、「方言研究の概観」岩波講座（昭和七年）新村出先生の『東方言語史叢考』（昭和二年、岩波書店）、橋本進吉先生の『吉利支丹教義の研究』（昭和三年、東洋文庫）、湯沢幸吉郎先生の『室町時代の言語研究』（昭和四年、大岡山書店）、柳田国男先生の『蝸牛考』（昭和五年、刀江書院）、佐久間鼎先生の『日本音声学』、服部四郎氏「アクセントと方言」国語科学講座（昭和七年、明治書院）などのほか、音声学協会の季刊論文集『音声の研究』I～V（昭和二年～七年）およびその機関誌『音声学協会会報』

一〇・二二(昭和三年(六年)や、雑誌「方言」一巻(二卷)昭和六年(七年)に発表された金田一京助先生はじめ、宮田幸一氏三宅武郎氏、服部四郎氏、有坂秀世氏らの諸論文であった。

私の「国語史と方言」という問題に対する研究興味は、上記の諸論著のほかに、橋本進吉先生や、小林好日先生や折口信夫先生の国語資料に関するお話や、金田一京助先生や東条操先生の方言資料に関するお話などによつてますます深まった。

しかし、考えを精密にして反省すればするほど、あまりにもすべきことが多すぎた。限られた時間と限りある体力とを以て、研究を強行しても、それはいたずらに皮相な発表に終わり、粗雑な研究に終始しなければなるまいとおそれた。

すべて言語研究は、その本質から考えても音韻・文法・語彙のいずれの面もすておけない。それはすべてが揃つてはじめて言語研究の完全を期し得るからである。

言うまでもなく、日本語の研究資料としては、すでに記録されている文献資料がある。遠い過去の時代から現代にいたる文献資料をもととして探査することは、古くから行われ、かつ、かなりの業績が発表されているが、その資料には限りがある。特に古くさかのぼればさかのぼるほど資料の制約があつて、しかもほとんどが京都あるいは近畿地方を中心とする言語による記録である。これに対して方言は広く全国に生きて現存する。しかも後者に対する科学的研究は少ない。言語研究の部門として先ず方言の科学的研究こそ急務であることを自覚した。その方言研究を全うするために二つの方法が考えられた。

一つは狭い区域に対する音韻文法語彙に対する全体的調査研究である。一地点の記述的研究を完成して逐次全国におよぶ方法である。

他の一つは、音韻・文法・語彙のいずれの面かと取組んで、全国におよび、しかる後、またもとへ返つて他の残された部門を追求してこれをくりかえす方法である。ただし、この方法は、相互の関連を考慮してなされなければ失敗に終わる。なぜかというたとえ音韻だけと取組んでも、その方言の文法や語彙に対して無知であつたら、その方言の全体系がつかめないからである。言語は音韻と文法と語彙とそれぞれ切り離せない。すべてを合わせて一体系をなす。

したがつたたとえ一部門の研究にしても、つねに他の部門との関連を考慮しながら研究を進めなければ誤りをおかすおそれがある。特に文法と音韻との関係はゆるがせにならない。また狭義の音韻と音調の関係は特に密接である。

以上二つの方法のうち、私は後者を選んだ。しかもまず音調(Pitch accent)部門の研究に重点をおくことにした。音調については東京語について佐久間・神保・三宅氏らの研究が発表されていたが、全国の方言については未知のことが最も多く、ただ服部四郎氏の概観的論文がめだつたにすぎなかつた。他の部門に関しては、たとえ断片的な研究発表であつても、それらを通して、諸方言に関する大体の推定があつたが、音調に関する限り未調査の地域がどんなものであるか、全く見当がつかなかつた。それは音調そのものの科学研究がきわめて新しいもので、明治二

十六年の山田美妙が東京語について残した「日本音調論」(國語大辭書のうち)以来大正初年から昭和にかけて、やはり東京語を資料とする佐久間・神保兩教授の研究や方言を扱ったポリワノフ氏の研究などが漸く発表されるといっていいで、他の方言研究の部門に比較して、全国方言研究の立場からは、最も後れた部門であったと言つてよい。しかも諸方言に関する限り未調査の地方が多く、たいへん複雑な分布を示しているのではないかと想像された。そして、音調の歴史をたどり、あるいはその本質を明きらかにするには、まず、どうしても現存する諸方言の音調体系をすべて明らかにする必要がある。そして方言音調に関する限り、語彙や文法などにおけるような通信調査はほとんど不可能だから、どうしてもその地方に出かけて調査しなければならぬ。これは研究室や書齋に籠るだけでは完成されないことだから、このままで交通不便な僻地の方言音調の調査は未知のまま永久にとり残され資料不足のため、音調の史的研究や本質研究はかなり遅れるのではないかと危ぶまれた。とにかくいろいろな面で語彙や文法の調査よりはるかに困難であると考えられ、しかもすておくことによつて、いつまでも実態を知りえないおそれがあることを自覚すると、どうしてもまず若い体力のあるうちに全国の臨地調査を実行しなければならぬと決意した。また、たまたまある方言音調に関する他の研究家の発表があつても、調査語彙の相違や調査方法の相違もあつて全国比較研究の資料として使用し難いし、その他観察上の誤差のおそれもあることが考えられたので、できるだけ、同一調査者の耳と頭で全国すみずみまで臨地調査して、まず

全国方言音調の資料を集めようと決心した。今は、音調研究が進捗して調査方法も、調査語彙も、その歴史も本質もかなりはっきりしたので、ある地点の音調調査は他の部門に比較してむしろ容易になったといえるが、二十六年前の臨地調査はたいへん困難であつた。この調査は、音調の歴史的研究やその本質に関する研究の基礎資料としてまず必要であつたが、同時に他の音韻や(狭義の)文法の部門に対する研究への試金石でもあつた。したがつてそれからの調査は音調に重点はおいたが必ずそれ以外の部門に対する関連性は常に考慮しながら進めることにした。この研究構想は、当時金田一京助・橋本進吉・東条操・小林好日・折口信夫の諸先生にも承認され、いずれも私の調査を激励してくださつた。また旅行して多くの費用を必要としたから父や兄にも了解を求めてその協力を受けた。当時私は今の麻布高校の前身麻布中学に週二日の講師をしていたのは、すべて研究に集中することができた。麻布中学の清水校長も、私の研究をよく理解してくださつた。そして校長自ら熱心にすすめられた麻布中学専任教諭を辞退しても、研究上の便宜のためという理由を快く認められ、その後、橋本進吉先生の御推薦で府立高校(都立大の前身)教授に就任した場合も同様であつた。そのために東京近隣は数日ずつほとんど隔週ごとに調査に出かけ、夏休みは一月以上続けて遠隔の地方の調査に当てることができた。北海道・樺太の北辺から、九州などの調査はこの長期調査によつたものである。「曖昧音調」を発見したのも昭和十年の夏休み、九州を歩き続けている時であつた。これは一か所に一週間もかけてその実態を究

明し、他の地点に出ではまたもとへもどって、比較考証して漸く自ら認定したもので、音調の型の区別のある全くない一型音調（崩壊一型）一歩前の姿であることを確かめることができ、その名もその実態通り「曖昧音調」と名づけた。四十余日の調査を終えて、まず第一に金田一京助先生をお訪ねした。いつでも、長期調査を終えて帰京すると最もよく相手になってくださったのは、金田一先生と東条先生だった。私は両先生にいろいろ報告するのが何より楽しみであった。金田一先生は、夜晩くまで私の夢中に話す相手になってくださいされ、特に「曖昧音調」発見の場合も、「それはありそうなことだ」と喜んでくださった。令恩春彦氏も先生と一緒に、始終ユーモア豊かに朝から晩くまで話してくださった。特に春彦氏と私は時の経つのも忘れていたようだった。今にして想えば、貴重な時間をたびたび長い間さいてくださった京助先生にはたいへん迷惑をおかけしたことを恐縮している。

私は多くの偉大な先生に師事することができたが、また優秀な知友にもめぐまれた。中でも方言研究については、金田一春彦・林大・知里真志保・島田勇雄の諸氏がまだ大学在学の頃、一緒に琉球方言の研究を思い立ち、那覇出身の金城朝永氏宅（菓鴨在）に集まって、金城氏に那覇方言の講習を受けた。これよりさき、私は首里出身の比嘉春潮氏・八重山出身の宮良当壮氏・国頭出身の中宗根政善氏らについてそれぞれ出身地方の手ほどきを受けていたが、金城氏には音韻（狭義の）・語法までかなり詳しくお世話になった。受講の諸氏も講義する人も、すべて言語学的素養が深かったから、或は師となり、或は話者となって極めて実験的に

しかも一面喧嘩ごうごうとして愉快な集まりであった。私の琉球方言の臨地調査が遅れたのも、戦争のためだけでなく、実はこうした学習機会に恵まれずぎていたせいもたしかにあった。金城氏については、その後またたびたびその発音を聞かせてもらった。

また、金田一春彦氏と一緒に九州島栖（崩壊一型の音調）の出身者（東京在）を訪ねて終日調査して、私の言う崩壊一型の音調がいかなるものかを再確認したこともあった。また私の下宿（渋谷区羽沢町）で徹宵して音調論を論じあかしたこともあったが、こうして春彦氏と肝胆相照らして話し合う研究生生活は全く楽しかった。これはまだ春彦氏が大学在学中のことであったが、私と春彦氏の調査と研究はこうした討論や談合の中で、切磋琢磨してどんどん進捗した。

昭和十一年に「南九州アクセントの研究」上・下を雑誌『方言』（六の四・五）に発表し、同十二年に音声学協会の「音声の研究」Ⅰおよびその『会報』45に九州全体の概観と「曖昧音調」とを紹介した。同年雑誌『コトバ』に五回にわたって九州方言を詳述し、『方言』七の六には琉球方言について発表した。ついで同誌に金田一春彦氏の「現代諸方言の比較から見た平安朝のアクセント」なる注目すべき論文が発表され、同じく同誌に服部四郎氏の「原始日本語の二音節名詞のアクセント」が発表されて、音調研究は一段と光ってきた。

ところが、日支事変はわれらの研究生生活にひどい制約を加えた。最も大きな衝撃は春彦氏に召集令状が来たことであった。大学を出てますます研究に精進していた春彦氏が、突如として出征

しようとするのである。私は学界のために痛恨した。たまたま入院されていた東条先生と相談して春彦氏の送別会を開いた。有坂秀世氏をはじめ在京同志相集まって、春彦氏と金田一京助先生とを囲んで送った会は、さすがに悲壮な気分がみちていた。その翌日、新宿駅での別れは全くつらかった。

私の調査も同時にはばまれた。それは要塞地帯やその近隣などの方言調査がたいへん困難になったことである。昭和十二年の老岐・対馬の調査や、津軽の調査では完全にスパイと間違えられ、調査資料のはいつた荷物を一時ではあったが没収されたことがある。特に前者の場合は白地図を幾枚も持っていて、それに、が行鼻音が珍しかったので、音声記号⁹⁾でその分布を記していたから、ますます誤解されるものになった。つまり何かの暗号とでも思ったのであろう。警察官も憲兵も音声記号を知らなかったのである。昼間の調査で疲れ果てて床についている夜半を襲われ、私が何と釈明しても理解しなかった。特に多くの白地図を荷物の中に見つけた私服の刑事と憲兵は、目を輝かして真犯人なりとほくそ笑みしたのであろう。私の荷物を全部まとめてへ明朝、署まで来るように」と言い残してひき揚げたのである。

翌朝署に出て説明したが、なかなか誤解はとけそうもなかった。そのうち、熱心に訊問する署長の発音に私の神経は集中した。そして私は怒りを忘れ、ただその発音に聞きとれていた。

私は思わず、とっさに声を大きくしてへ署長は熊本玉名郡の方でしよう」と言う、署長はびっくりして、何故わかったかと反問した。そしてますますすみにおけない犯人と半ば疑ったかに見

えた。そして主任刑事を呼んでへこの人に君のことばを聞かせてみろ、君の故郷がわかるそうだと聞いた。私は嬉しかった。今度は正式に代表語例を用意して十分間ばかり調査した。完全に鹿兒島だ。しかも薩摩半島の方だとわかった。すっかり感心した署長は、それから、私の釈明をよく聞いてくれた。スパイだということ先入主がなくなると全くよく理解してくれて、なおかつ昨夜来の無礼を詫言じた。私はその代償に、この署に勤務する純土着人の発音を聞かせるように要求した。それからはうって変わって優遇され、事務員から小使までの中で適当な話者を私自ら選んで終日貴賓室で調査することができた。

これは言わばハッピーエンドであるが、つらい思いをしたこともあった。たとえば、学校を訪ねて行った時など、リュックサックを背負った私を見て、宿直の職員が押売りで見誤ったのであろうか、何も申し出ないうちに、へ何も要らない」とどなって玄関払いをくったこともたびたびあった。

私は精密な調査をする一面、つねに日本全体の概観をするように心がけた。たとえば九州の一型と奥羽の一型とはたして同質のものか、あるいは九州の東京式は中国や東山・東海のそれと同じかどうか、あるいは北奥や北海道のそれとどんなに違うか、京阪式の中でも四国の京阪式と北陸のそれとはどう違うかなど心にかねながら概観のための調査旅行も時折実施した。

この方法は偏見にとられず、視野を広くして音調法則の公理を見出だすことを助けた。

昭和十一年の暮から正月にかけての比較的短期間に、東京から

九州へ下り、さらに薩南から北上して中国・近畿・中部・関東・奥羽北海道までの広い地域にわたって、その要所と認められる方言領域に下車して聞きとりをしたのもそのためだった。『方言』七の五の「九州から北海道まで」（昭和十二年）はその記録である。しかし、この種の方法は、あくまで参考のための予備調査であって、本格調査ではない。本格調査ではゆっくりその地に落ちついて調査を進め、確実な成果をあげなければならぬ。たとえ、その計画によって、ある地方における調査地点の網の目は荒くてもその調査地点に関しての調査は徹底した精密調査でなければ学界に貢献するところは少ない。ある時ある方言についてなされた調査資料は、将来誰でも活用できるものでなければ方言学は進歩しない。将来の学者がまたもとの振り出しにかえって出直さなければならぬような粗雑で不完全な調査は避けたいものである。

これは西洋の言語地理学的方法と反するわけであるが、私はある地方における調査地点の網の目は、はじめから画的にすることをしなかった。たとえば予備調査その他の知識によって異なる音調体系が対立していることを知ったり、曖昧音調であったり、音調の型が変化しつづつあると認められたりするところでは、町・村の字ごとに調査して網の目をできるだけ細かにした。

さらに年令差による相違が認められるときは、老年・壮年・青少年の三層に分けて調査した。この年令別の規準は必ずしも一定しなかったが、大体、六十歳以上を老年・四・五十歳代を壮年・十・二十歳代を青少年とした。三十歳代は地方によって青少年にはいったところあるいは壮年に入れたところもあった。

これに対して、同一体系の音調が明瞭な型を保持して広く行われていることを認める地域では調査の網の目を荒くした。粗雑な調査は科学的研究の資料になり得ないから、根本からやり直さなければならぬが、調査の網の目は、はじめの計画では荒くても後日、必要に応じて調査地を増加して細かにすることができたら、はじめから必要以上に細かくしなくてもよい。

さて天は長く学者に禍いせず、春彦氏は病の故をもって間もなく召集解除になり、同時に健康も回復して、引き続き研究に邁進することになったことは祝福すべきことであつた。

その間、私は、小林好日先生のすすめを受けて先生と奥羽方言の再調査をしたが、昭和十五年の六月に、北海道・樺太以下九州まで七百数十か所の臨地調査による資料をもとにして、日本全国の音調分布のあらましとその系統的分類を試みた『全日本アクセトの諸相』（育英書院）を、東条先生の積極的御推薦により出版した。同年九月には春彦氏の「国語アクセントの地方的分布」という論文が「標準語と国語教育」の中に発表された。

これらによって日本語アクセントの分布相がほぼ明らかになつたわけである。

方言音調の調査研究は他の学界にも認められ、昭和十六年、橋本進吉先生と小林好日先生の推薦で、文部省語学振興会の国語国文学会で「国語の音調」を発表したが、ついで日本方言学会では会長柳田国男先生や東条操先生・橋本進吉先生らの計画で、丸の内の産業中央会講堂で、音調ばかりの公開講演会が催された。その講師は三宅武郎・金田一春彦の両氏と私の三名であつたが、聴

講者は堂にあふれるという盛会で、一般の人でも音調研究に関心を持っていて痛感した。そしてますます調査の充実につとめた。そして、この頃は八丈島をはじめ伊豆の島々や佐渡島や四国などをはじめ、調査の網の目はかなり密になった。

また、音調の素性でも、たとえば福井県下に分布する曖昧音調のように、親や祖父母が曖昧音調で、その子の小・中学生は完全に一型化（崩壊一型）しているとか、ことばの島をなす山形の香澄町弁のように、四十歳代の父母以上は遠州伝来の音調の型の区別があるのに、その子の小学生たちは山形市一般と同じく一型化しているとかいう事実が明らかになり、音調の性格の一面を知ることができた。

以上の方言音調の研究は『国語音調論攷』としてA五版千二百余頁の単行本としてまとめられ、昭和二十年に富山房書店から出版される予定であったが、八百余頁校了の時、印刷屋と自宅で罹災焼失し、出版中止となった。昭和二十六年に刊行した『九州方言音調の研究』（学界の指針社、文部省助成金による）はその資料篇の一部を成すものであった。

昨年刊行した『日本語音調の研究』（明治書院、文部省助成金による）は旧式にとらわれず、その後の調査資料を補充して、二千六百か所の臨地調査による方言音調資料をもとにして、音調の歴史を考え、その形式と系統とを明らかにし、その本質を究明したものである。これは二十六年以上の調査と思索をもととして書いたもので、資料篇はなお続刊の予定である。音調研究もこれで終わりというわけではなく、ますますいろいろな問題を考えるよう

になって、際限はないが、最近では音韻（狭義）や文法や語彙も、はじめのプランに従って逐次調査をすすめている。そして国語史と方言の問題は常に私の脳裏を去来する。なお、若い私の研究仲間がどしどし出てくるので、従来の音調研究を一つの試金石として、他の部門の研究もかなり有利に展開すると信じている。

—都立大学教授—